



博文館

博文館記念書翰集

其二

18  
71  
2



博文館記念書翰集

其二

芥川龍之介

精 18  
71  
2

2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8





大橋進一君  
卷中目次  
昭和五年  
八月五日

2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8





卷中目次

大橋進一君 昭和五年八月五日

田山花袋氏 昭和二年十月二十日

石井研堂氏 昭和三年四月二十二日

松原岩五郎氏 大正六年六月二十日

森山吐虹氏 明治三十九年四月十七日

木村定次郎氏 大正三年五月

海賀寫磨氏 大正五年一月十九日

阿武信一氏 月二十日

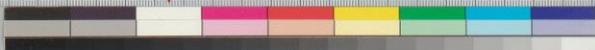
西村惠次郎氏 大正六年六月二十日

金子範二氏 大正六年六月二十日

武田鷲桃氏 大正五年二月八日

以上

2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8





信越線田口駅  
 妙高温泉か夜た館方  
 坪谷善四郎様

昭和五年八月五日

東京市小石川區戸崎町四十六番地  
 株式會社博文館  
 取締役社長 大橋進 一  
 電話小石川七八〇〇番

拜啓炎暑の候益々  
 は清祥奉慶加へ  
 陣な本名はは字を頂  
 戴致難存お見化  
 暫くは博正の故お取  
 化、迄ふは大切、は静

素心

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9



藁紙類存お見付  
暫くは懐土の故お取  
付、之を大切、は静  
素神遊る

は仰、如く本年も昨年  
の例子倣へ雜誌宣佈  
は利用お取合ふ事  
日嬉楽もの少々は送  
付申上せむ乍御返  
様可然は領布は款  
申上

次、先般は配座お  
取付 姉崎協士

標牛の序文お頼  
め如早速作成当方  
は届御下せ居何年  
安神御下ふ斯く  
達々右揮お事一偏、  
先生は配座の賜と  
深くは礼申上

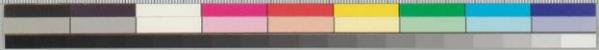


標牛の序文お頼  
お如早速作成当方へ  
お届被下共何卒お  
安神被下至斯く  
速々右運共事一偏  
先生のお配慮の賜と  
深くは礼申上げ共  
不取敢右は運共傍  
は挨拶迄お断と成

ハ子音 函具

大橋進一

坪谷善四郎様



いづれは身沙汰  
一巻品 今回廿結搦  
北の地理書目 頂戴  
出来かやろは話 致下  
は隆にていふ、地理

牛込区北山伏町  
坪谷善四郎 投  
市代木一三三  
甲山録 湯  
廿



2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



一 今回は結搦

北の地理書目頂戴

出奉るやうに話致下

は謹にていふ、地理

を讀く便を得感謝

仰

女子送るは神状

出子 先は神状

ごうのりるは目

り 兼 二日中

七不宣

井 甲山生

坪谷先

石







挿紙  
印籠衛成以甚高  
頂戴感佩之極  
十年名  
實疾挿紙  
角身の芳書也

中込止北山伏町七九  
坪合善四郎様  
好上其可なり一  
松平屋下

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78





不為共十  
大隱  
笑  
快然  
心  
好  
心  
苦  
寸  
大  
大



来流の身

河好誼兼心

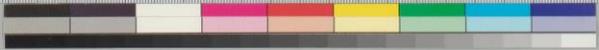
心が揮毫の

蒼意

寸姑

松岩

坪谷水成様



午に矢耳 四角地  
坪谷水抄 輝  
丸

二箇圓竹十五  
十七日  
出山抄

如

奉口法調宗し

弘明抄之

彼之末々

廿二抄抄

何れ抄

侍積抄

...



の  
は  
ま  
ま  
し

侍  
積  
之  
為  
也

亦  
今  
早  
朝

丁  
未  
朝  
解

し  
り  
取  
有

の  
訪  
問  
も  
も

し  
る  
途  
程  
探  
探

の  
終  
了  
も  
も

事  
し  
終  
了  
も

し  
る  
途  
程  
探  
探

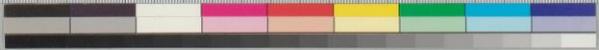
矢  
先  
に  
も

出  
立  
の  
旨

し  
事  
前  
に  
件  
を  
以

て  
申  
上  
げ  
た  
旨

上  
下  
の  
旨





牛込区世山伏町  
榊原善四郎殿  
申下

入  
吉月  
天正元年二月  
木村元吉殿

解啓 望此の春の事しるる  
一方をぬり配慮し煩し  
申訳知れり多し  
君年々礼しお異見有る  
所者今春の事皆鎮年の希

小舟用  
四十四年度

望の有るは 現職に在る  
に若くは 又過月 言ひ傳ふ  
く 足改の事 他日 可事  
業に 以て 打ち 寄る 野望の



く返答の状は他より日一り事  
業に以て打たる。等々の野望の  
長を以て此は全に少年即身

（六）

以外別方面。自己の新天地を  
發見し事々苦慮して其  
長を以て其の一封呈  
を以て其の許すを以て其の  
如くは少年の死過の強恩

小舟用

四十四年度

對し聊か其の思ふ所と具  
陳したるの状とて孝友及  
友合先生を以て對し其の  
事の中を以て此の状を以て  
其の先生の狀とて其の状を以て

（五）

とて其の状を以て其の状を以て  
中にも其の状を以て其の状を以て  
記し其の状を以て其の状を以て  
其の状を以て其の状を以て

（四）





牛込区北山伏所廿九

坪左善四郎様  
親展



麻布区西殿所一

一月廿九日 海賀篤麻

打張  
今日不安退館之際  
館主より特別の口白を賜  
り誠に感謝外是之の由  
引退せられたる理由に就  
て少の異議は有之しや  
抗争致すは之の効果を  
得ずと雖も唯々之の由を  
しむるに有之は是なり  
是等事は申すに及ばず  
去る年十一月の如く  
猶も従事し奉り文を格何れ  
に別しは當りと先ふた  
感あるに及ばず程且中  
前送りの如く甚だ衷心



猶子徒事し事々文藝何事  
別しは愛以と先ふた  
感あるに事す程且中法  
前途に就く古甚に寒心の  
乏しもの増之 古より思  
見開陳に法勿論才能の故  
を以て鉛と逐るん存 唯生如  
の意見か 何事の廣は 有る  
もあふふく之より思ふより十  
度一得ありし事す 苟も竟  
の言と一ヶ月は口聴而  
らし

文藝何事す 對了之見

一近來中法の振るきは一般藝  
法身の不振に因り自由論を  
販賣方法の一部の責任は  
負けざる可からざると思料す  
館以外に有りせん 唯新法  
の弊は 後者等の 甚くは  
反して 弊之館の 廣告は 金弱  
あり 強は 文藝何事す 故に 起  
ると、或は 説と 有す 者 女 人  
之 體 何 事 日 二十 餘 年 之 久 矣  
と 身 之 行 一 つ 可 雜 法  
る 在 殊 更 之 勢 大 一 後  
其 子 共 知 人 必 知 徒 事  
権 力 之 術 一 長 久 者 也  
言 職 之 得 仁 足 人 之 口 自 見 地  
と 之 拱 手 是 起 ち 之 世 大  
之 強 あり 故 之 宜 打 癩 地  
言 之 子 相 當 之 節 存 之 尺 位 也  
者 之 文 藝 何 事 之 術 之 術 之 術





も其所とあり所 他雑誌より  
可成るものあり 但し近來  
稍材料の平凡なるものあり  
演藝記事の比較的少くは注  
意されずと云ふ可。

○本欄 (巻頭十位以下  
脚中身雑誌外各)

文藝何れ部の 價値は雑誌以下  
にあり、と云ふ一点張りに中  
欄と開却すは甚不評

ある。文藝雑誌と娛樂雑誌と  
は自ら区別を爲さず、文藝何れ部  
がいかた俗了したるを以て之を

未だ以て 娛樂雑誌たるに  
甘んぜらるる日あり、七割も一般  
の文界に於て 中法を目して

中法と云ふは、娛樂雑誌と云ふは、娛樂  
樂的の雑誌と云ふは、娛樂雑誌と云ふは、娛樂  
樂的の雑誌と云ふは、娛樂雑誌と云ふは、娛樂

樂的の雑誌と云ふは、娛樂雑誌と云ふは、娛樂  
樂的の雑誌と云ふは、娛樂雑誌と云ふは、娛樂  
樂的の雑誌と云ふは、娛樂雑誌と云ふは、娛樂



吾之文には 文藝の中心は  
餘り老練なり 去れど  
此の如き 興味中心  
的のものと満載  
一部の讀者を牽制せんとする  
其見地や甚だしく 志の  
事毎々の之は 供とて 此の  
せん、見よ 女法の揚々つゝ  
あふ説の一事に 見よに 是  
ありて 陳腐なるは 平  
凡な 懐かぬ 唯むらび  
いかに 野郎の古き 談者あり  
とて 此の如き 満足すべから  
加之 是等の 讀者は 年と異  
又 減退し 新空氣と  
嘆息す 青年の 智生す  
時代を 放つや、 昨一年石  
の如く 文壇の 注意を引  
きたる 作家は 田山衣衣氏の  
「海岸」の 一編のみあるに  
にまつは 心細き 限ありや  
故に 新進作家を 迎へ 吾  
新旧の 別を 在るに 尚ほ 文  
壇に 生命を 保ちつゝ、 凡そ  
秋夕、鏡花、吾系、掬河、  
等の 作を 掲載せば 文壇の  
部は 存する 吾系と (文壇上  
に 放つ) 先陣を 取らざらん  
文壇に 既に 絶命者あり  
んば、 吾系三昧、汝存す





「海樵問答」の如きは約三十年

前「國民小説」に出たり春の泉

文(折也)の「細君」を布行した

と述すす「細君」の如き

痛切な一冊の如き

其、三十年前首の「作物」大正

五年の「作物」を「陸溜平

凡の如き一冊の如き

此の如き一冊の如き

「お玉地」

方「お玉地」の如き

「直江山城」の如き

「山田洋

南有人の「お玉地」の如き

「お玉地」の如き



揚げたる 暖ね子の「お玉地」  
方子への興味はあつた、  
新筆子展覧のあつた 後  
は「直江山城」のあつた 同  
とくに足らぬ、寧ろ 山田洋  
南有人の「お勝さん」の方を採  
らんとす 徒らにうねる 原  
料を採りて 老大家と巡り  
際には昔々より 所々  
は池子 執し方子の意んを  
「あゝ」と先んず 摺  
筆すこととす  
大要古くは 易い見え  
持に足らぬもの少く  
只の意を 採りて 後  
は方子の意ん 心  
をたつとも 採りて 解  
す 幸い 過之い お月

廿九日

海峽馬場

坪内善四郎

は



坪谷水成保  
長齋

名  
阿武信一

お感先程事欠  
為去程と記也館  
規と事と如何  
昔忘難と如何  
片甲字一在亦  
拜趨親書

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



此甲子年一正味

舞趨親お遊

いたにあふふ

わあふふとあふ

あふふとあふ



予の胡弓也

本多氏より贈る

一層の徳也

徳也

く一丈の平也

心也

不忽也

新也

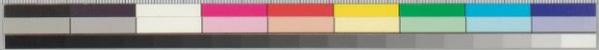
何中

也

先右

也

胡弓



吳健

博考是也

王右軍

少生名之於世

末心已車竹公

二十餘歲能

長任之法之疏

產名出而之也

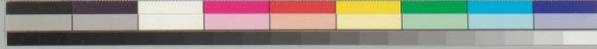
後多述結漸死

尔の所由始願

世ん百之思記

とてらるる也

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



牛込正北山伏分二九  
坪谷善四郎様



九  
梅亭

六月二十百

西村港

貴物相滞...  
打絶...  
...  
...  
...  
...

存...  
...  
...  
...  
...  
...



貴物相滞 取ふるは  
打たす 昔抄の 子孫  
等 兼いも 今 田舎  
可川 正 舟 舟 舟 舟  
然 然 然 然 然 然  
者 者 者 者 者 者

存 存 存 存 存 存  
可 可 可 可 可 可  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
の 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟



牛込北山伏町二九  
坪谷善四郎様

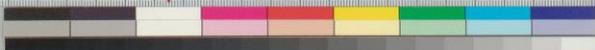


封

青山真樹町二四  
金十(一)軒二



群 啓 法 懇 蓮 子  
法 書 面 を 照 り 子  
細 承 け ま っ け り 前  
後 九 年 に 余 の 長 年 間  
法 指 導 身 具 法 眷  
顧 に 對 し 法 紅 の 申  
上 げ や も 無 し 次 才 も  
其 中 群 啓 法 眷 漸  
意 々 書 し 送 け ぐ ち なる



上げやも無しし汝才も  
其中一伴 終る謝  
意も書ししむけなくも  
居りし事なれど任こころ  
却りし 丁寧も清く  
心なき思届かぬ  
るじ又本りこそ  
不束ふが文事執り  
是に二十一年 今にも之ま  
と悟つはますかに残るく  
こゝ昔成度の待合と違  
や今再び筆は執るす  
可く又心はり故ぞ并  
耳はしむ 拓きと受けこそ  
夫にも謝絶し、ま暫くは  
十日を送りてくとも居  
りし早くとつてまゝ成  
身を投ずは未ぶある  
さ(無)へ昔事な浮ぶ  
瀬も清く 清く日清の  
清く 愛顧と清く 清く  
眼りたく尚ほまゝ事の  
経過の上より清く 扶助と  
清く 永まの清く 懇情と  
奉りし縁と思ふも  
何事清く 後役の清く



清 愛顔と清 日清と  
其りなく尚ほまゝの  
徑道の上より清 杖助と  
下ぐさゝも。堪合にあ  
まふ永幸の清 徳清と  
奉りて。縁と思はし  
向ふ清 後俊の清と  
清に預上げ置きまゝ  
時は五月 間の時  
節たふく清 自愛は  
はさむらゝ其中 拜顔  
の体を得る委曲と  
たことわじ 清と  
汝具の

六月二十一日

全十頁二

坪谷善四郎傳

清 時文



牛込区世山伏町廿九番地  
坪若喜四郎保  
二  
物展

孤  
志  
奇  
之  
日  
記  
庭

未  
切  
庭  
町  
七  
番  
地  
武  
田  
首  
保  
如

誰  
能  
任  
事  
所

古  
白  
海  
堂  
の  
復  
活  
不  
可  
惜  
也

趣  
探  
而  
其  
口  
就  
の  
豫  
免  
也

弟  
右  
主  
陳  
と  
名  
は  
石  
橋  
先  
生

山  
本  
東  
山  
様  
迄  
未  
知  
跡  
此  
の  
と

と  
山  
本  
東  
山  
の  
と  
り  
お  
話  
を  
聞  
か  
し  
て  
は

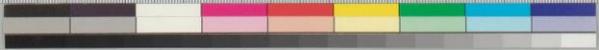
曾  
了  
少  
生  
文  
藝  
會  
館  
長  
殿  
に  
お  
手  
紙  
を  
送  
り  
ま  
す

に  
関  
係  
は  
ご  
承  
知  
願  
い  
ま  
す  
ご  
自  
由  
に



と山はあつた沃産の元  
曾了生文藝を促す如く強弱  
に據るは其の歴史に在りては  
々々生か再び文藝に復るは  
信し即ち君子の能く運  
動を周知する某の氏有るは  
一此中生は勸めると石橋先生  
平乃其存意に報ふべくは  
森氏は其の信を以て且つは  
中生は限心とて即ち古界は実  
の進退と逐つてせむる三番五々  
茶壺類に達せし是彼主は  
以希望に在りては強弱は其  
に氏は其運動に阻せしは其  
一五七々其都致る二番八々  
其培い未王の奉城を以て  
此は生年より其の南に在り

2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8



此乃在運動に阻止せしむる故  
 一五七午此都致意二番八ヶ粒  
 日培い来りて今本城を以て後し  
 此等は生年より之を苦痛を極に  
 右に右橋先生傳來に對して  
 可成希は氣を以て静養を望む  
 此等如くは注がれば右裏情は  
 恒常の上と幹筋の方を以て或は  
 右指は此由迄有る御印半  
 此等事句も此一年も此右橋  
 先生は此病氣中や生を以て氣  
 性如刀せしむるにやう致す  
 右の如くは中々此通に可なり  
 又此等の強痛は格別陽得と  
 醸成は戲句的有閑な餘地  
 ありありと思はれ上右橋先生



古の道中を歩くと

文藝としての価値は格別得る

醸成は戯句の奮闘の餘地

あるものと思ふ以上右張意

出陣の心は幸甚はす

謹啟

菊

二月廿日

武田虎造

坪内善四郎

以詩史





内  
付  
文

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8

